

谷村 吉隆 京都大学大学院理学研究科 教授

分子研のために(その1~4)

たにむら・よしたか

1989年 慶應義塾大理工博士課程終了、理学博士(物理)。イリノイ大学アーバナ・シャンペン校ベックマン研究所(P.G. Wolynes グループ)及びロチェスター大学化学科(S. Mukamel グループ) 博士研究員、分子科学研究所助教授を経て2003年6月より京都大学大学院理学研究科化学専攻教授。非線形分光、非平衡統計力学、物性等を中心とした化学物理理論がグループの主な研究テーマ。趣味は登山で分子研時代にもモンブラン、アコンカグワ、玉山等の世界の最高峰に登る。



分子研レターズの下稿は論文書くより難しい(厳しいレフリーもいるし)。このタイトルは漫画「あしたのジョー」の「あしたのために」をもじったものです。「あしたのために」は、鑑別所に入っている矢吹ジョーという主人公が、強敵である力石徹と戦うために、土方風のおっちゃん(丹下段平)が、あしたのためにその1、その2……という葉書を書いて、ジョーにボクシングの神髄を教えるというものです。タイトルは「エースをねらえ」でもよかったのですが、分子研レターズの読者層の年齢構成を考え表記のものにしました。

分子研のために(その1)

ひじを左わきの下から離さぬように総研大生を集めるべし

総研大の充足率が低くても、分子研にはあまり切迫感があるように感じられません。総研大は分子研の屋台骨を形成しているわけでもないのに、総研大の定員充足率は大学ほど切実ではないのでしょうか。有名大学の大学院が容易に入れる昨今、総研大に学生が向かう積極的な理由が思い浮かびません。有名大学と言ってもお金や教員の魅力もたいしたものではありませんが、分子研がそれに勝っているでもないのが

実情でしょう。が、もともと定員が少ない総研大は、少し工夫するだけですぐに定員は埋められるはず。国内市場をあてにできないのは他大学と同様ですが、分子研は海外から5~10人も呼んでくれれば十分なのです。そう考えると、漠然と世界に向け宣伝するやり方は効率的ではありません。対象を絞り集中投資するのです。例えば開発途上の国や、開国したばかりの国のトップの大学と戦略的互惠関係を結び、共存の道を探るのです。教育レベルが心配かもしれませんが、分子研から人を送りこみ、学部教育からコミットすればよいのです。素質があり士気の高い学生に、しっかりした教育をほどこせば、分子研の欲する学生を獲得することが可能でしょう。それら学生は、母国で教育や政治を動かす人材となり、将来的には分子研を助けてくれることでしょう。JICAや政府からお金を取ってプログラム化すれば、懐も痛めないし、それは分子研のかかえる各種人材問題を解決するカギになるかもしれません。人がかかわる問題は、結局信頼関係が基礎です。特にアジアとの関係を強化するためには、学部レベルの学生からアプローチすべきだと思います。

分子研のために(その2)

クロスカウンターパンチで理研を打つべし

文部省が文科省になり科学技術庁を父とする異父兄弟の理研がやってきました。八方美人で社交的な理研は、分子研が基礎学問にこだわり、流行りもので規模拡張に走る事を恥じている間に巨大化し、それがまたお金と人を集め分子研の存在感がどんどん小さくなっているような感じがいたします。そうではないと反論する人もいるとは思いますが、これは相対的なもので、分子研の中にいてわかるわけではないと私は思います。もちろん、理研のようになることが良いか悪いかは別の話です。そして、その状況を私流に比喻するなら、郊外型スーパーに客を取られた駅前の八百屋です。

郊外型スーパーに対抗するには何が必要でしょう。特徴を出せというのは簡単ですが、1軒でやったところで客足はもどらないでしょう。それには地元の商店が運命共同体として連携する、すなわち岡崎の3研究所は、一丸となるぐらい連携を深める必要があると思います。例えば、3研究所内にそれぞれ流動部門を設け、教員を異なる研究所へ出向させるというのはいかがでしょう。交流により

新たな息吹が吹き込まれ、人事の閉塞感もかなり取り除けるはず。山手地区は3研究所交流のために作られたと聞いていますが、辺境にある山手地区は、そもそも交流にあまり適した場所だとは思えません。そこは3研究所のプロジェクトスペースか、新たな研究所にでもして、交流は母屋のある明大寺地区で、かつ戦略的にやるべきです。商店街を盛り上げる行事も必要です。部門別全国修論コンテストや、岡崎3研究所の癒し系キャラをつくるとか。

分子研のために（その3）

フットワークで分子科学研究所になるべし

何度も言われてきたことですが、分子科学研究所と言う名前、上手くつけたものだと思います。が、分子科学研究所は、実は物理化学研究所ではないでしょうか。実際、分子研が華々しいと言われた時代は、物理化学の黄金時代に一致していたような気がします。昨今、物理化学は学生の人気も、そのイノベーションも、もひとつパツとしませんが、分子研の方が少し先行しつつも、その傾向は同じだと思います。物理化学研究所としては、それ相応の業績を上げているのだとも思います。皮肉なことに、物理化学研究所と名付けなかったゆえに非難されているわけ。となると解決方法は2つあります。一つは物理化学研究所と改名するのです。いまさらそんなのいらんと言われるかもしれませんが、もうひとつは真の分子科学研究所になることでしょう。その芽はたくさんあったはずなのですが、物理化学の景気よさに慢心したせいかと、とりこぼしてきた印象を持ちます。

具体的に言うと素材開発に結び付いた無機や錯体にまたがる超分子系です。読者の皆さんも、この分野を引っ張っ

ている景気よさそうな顔の人たちが何人か浮ぶことと思いますが、この分野は分子研にいた、あるいは分子研にかかわった人が多いのです。思うにこの分野で成功している方々の多くは、物理化学的な手法の持つ普遍的な力を早くから見抜き、それを合成や素材設計へと生かし、大成功したのではないのでしょうか。アカデミックには大変面白いが、意外に実用的でない場合が多いのもその影響かもしれません。そして、その触媒になったのが分子研だったのだと思います。斯くしてこの分野に大成功を導いた分子研なのですが、肝心の分子研は取りこめてない、あるいは見捨てられてしまいました。ユニークな人材を輩出した関連部門ももうありません。10～15年位前は、米国で活況を呈し始めた生物物理化学に注目が行き、日本固有のこの分野が注視されなかった感じがいたします。今更この分野を取りこむことは現実的ではありませんが、この話は今後の分子科学の発展にヒントを与えてくれます。それは、物理化学的手法は強力であり、まだその洗礼にさらされていない地に持ち込むなら、強壯剤になりうるということです。

有機や創薬を初めとする伝統的化学に、物理化学的手法をもっと積極的に取り入れるなら、まだまだのびしろはあるのではないのでしょうか。異分野に入る時に大切なことは信頼関係です。例えば超分子関係をみると、その母体となる分野が、分子研に優秀な人材送り込んでくれた事実は見逃せません。化学においては分野としてのサポートを取り付ける事が重要なのだと思います。これまでもそういう動きがありましたが、もっと戦略的に行うことが重要なのだと思います。

分子研のために（その4） 攻撃の突破口を開くジャブ

分子研の存在感は、その先取性にあったのだと思います。助教授の昇進禁止、紳士協定による助手の任期制、ポストシステムなど、分子研の人事システムが大学で話題になった時代もありました。ある種、法人化を先取りしたところもあった分子研ですが、過去の制度に足を引っ張られたのか、最近では制度改革が後手に回っている気がいたします。分子研は多少肥大化しましたが、まだまだ小回りが利くサイズであり、新しいことをどんどんやれるはず。そのアイデアの源は構成員の飲み会から教授会議、主幹会議等の各種会合であり、雑談から激論まで強弱さまざまな議論を通して形成されていったと認識しています。分子研の職員は、まあまあの研究し、与えられた雑用をこなしているだけでよしとは思いません。分子科学活性化のために新しいアイデアを出し、積極的に動く人はいないのでしょうか。昨年度、私は客員教授をやり、京大の教授は暇だと言われながらも、かなりまじめに分子研の教授会議に出ておりました。が、そのような動きは教授会議に出るだけでは見えませんでした。動きはあるのだとは思いますが、分子研のような共同研究機関において、改革は自己満足ではなくて、外から見えるべきものだと思います。分子研で大変根深い問題は「先進的」であるというブランドイメージが損なわれつつあることです。それを立て直すためには、改革をジャブのように連発しないと。そして、その一連の動きは企業のCI戦略のように、統一的なイメージのもとに戦略的にやらないと、あまり効果がないのではと思います。